

飛騨獣医師会創立60周年を語る

大谷 健[†] (岐阜県飛騨獣医師会会長)

I 飛騨獣医師会創立60周年記念式典と飛騨びとの心意気

1 はじめに



平成27年11月15日、飛騨獣医師会は創立60周年記念事業として、国際セラピードック代表大木トオル氏の「日本初のセラピードック：風になった名犬チロリ」と題した公開講演会と、飛騨獣医師会会員を対象に日本獣医師会蔵内勇夫会長の「いま獣医師に求められるもの：獣医師をとりまく現況と今後の課題」と題した講演会を開催した。前者は高山市民ら約230名が、後者は高山市長をはじめ地域の関係団体の代表ら130名が聴講した。続いて記念式典、懇親会が開催され、盛会裏に閉幕した。出席者の皆さまからは飛騨獣医師会創立60周年記念事業にふさわしい、素晴らしい内容であり、飛騨獣医師会の強い団結の成果だとの評価をいただいた。これが実現できたのも近藤前県獣並びに日獣副会長及び石黒県獣会長の特別な計らいと、日本獣医師会の蔵内勇夫会長のご理解とご厚意の賜物であり、あらためて心からの感謝を申し上げる次第である。

飛騨獣医師会は、これまで創立10周年、20周年、25

周年、40周年、50周年と節目ごとに記念事業を実施してきた。特に25周年記念式典には中村 寛日本獣医師会会長を主賓に迎え、盛大に行われた。同時に「筋委縮症」に悩む旧会員で日展作家の「林 玉樹氏絵画展」を開催した。40周年では40年間の飛騨獣医師会活動をまとめた記念誌を発行した。50周年では記念誌を発刊する一方、大谷(会副会長)がクローン技術研究の一環として取り組んだ、シベリアにおけるマンモス発掘調査について「君はマンモスの叫びが聞こえる」と題して記念講演を行った。

私は懇親会の席で蔵内会長から、「全国の各県獣医師会を見渡してもこのように10年の節目ごとに記念事業や式典を実施しているところは数少なく、一支部である飛騨獣医師会が、折々にこのような記念事業を継続して実施できる要因はどこにあるのですか?」という質問を受けた。私は咄嗟に“一言で言うならば「飛騨牛改良に向けた、取組みとその成果が大きな原動力になっている」と考えています”と答えたが、その答えに間違いはないと思いながらも、具体性を欠いたもので適切な答えにはなっていなかったことがいささか気になっていた。記念式典を無事終えて、冷静になった頭で「この原動力



蔵内会長を中心に記念写真に納まる飛騨獣医師会会員

[†] 連絡責任者：大谷 健 (飛騨獣医師会)

〒506-0823 高山市森下町1-155-3 ☎・FAX 0577-33-1656 E-mail: ty.otani@eagle.ocn.ne.jp

は一体何だろうか？」とあらためて自分に問い直してみた。その結果、要因の第一は「歴史に培われた“飛驒の匠”の技」であり、第二に「歴史に翻弄される中で身に着けてきた“先見性のある企画力と実行力を伴った飛驒人の人間性”」ではないかとの結論に至った。10周年ごとに訪れる創立記念式典を開催することで、獣医師としての在り方や組織活動の推進及び後継者育成を怠ることなく進め、これらを獣医師会活動の両輪として実施してきた結果ではないかと思う。以下に著者の考える飛驒の匠、飛驒びとと飛驒獣医師会創立60周年記念式典について記す。

2 飛驒獣医師会を育んだ飛驒の匠と飛驒びとの気概

(1) 飛驒の匠の気概

万葉集 巻11-2648には下記のような歌が詠まれている。

「かにかくに 物は思わず 飛驒びとの
うつ墨縄のただひとみちに」 作者不詳

奈良の都で一心不乱に神社仏閣の造営に携わる「飛驒びと」の様子を詠んだものだが、大宝律令(701年に制定された日本史上初の律令)によって定められた「租、庸、調」の3種類の税に対し、貧しい飛驒では産物では納税ができなかった。そこで使役として納税する「庸」に年間100名から200名もの建築関係労働者が都に出向いたもので、この制度は平安末期まで約500年間も続いた。厳しい労役に耐え、真摯で並外れた技術を誇った飛驒人の技術は高く評価されて、やがて「飛驒の匠」として薬師寺、法隆寺の夢殿、東大寺をはじめ平安京や平城京など都造営の一翼を担った。そして各工事現場で全国から集まった数百人の労役者のまとめ役「飛驒工」として位置づけられるまでになった。山深い田舎から徴用されて、惶びやかな都に出た飛驒人は、全国から集まった労役者に対抗するため団結して労役に励んだ。優れた技術集団として1年間の労役を終えた匠たちは飛驒に帰って、都造営で学んだ技術や文化を建築や家具の製造ばかりではなくさまざまな分野で活用するようになった。私はこれらを通じて蓄積された、困難に打ち勝つ精神力と時代を読む先見性・実行力が飛驒人魂として今に引き継がれ、生かされているものと確信している。

(2) 飛驒びとの気概

飛驒は元禄5(1692)年～慶応4(1868)年の176年間、徳川幕府の直轄地「天領」であった。第12代郡代(代官でも10万石以上の格式を持つ旗本が代官に就任した場合の呼称)大原彦四郎の時代に起こった「大原騒動」と呼ばれる農民の騒動は、明和・安永・天命の18年間も続いたわが国でも有数の農民一揆で、飛驒人の結束力と実行力を示した大きな出来事でもあった。郡代の

あまりにも厳しい年貢の取り立てに困った飛驒地域の農民は6名の代表を江戸に送り、老中松平武元に対する籠訴を執行した。訴状は老中に握りつぶされ6名は捕えられて斬首され、首は見せしめとして塩漬けにされて飛驒まで送り返された。これに怒った飛驒地域の農民は女子供を除く15歳以上60歳までの男子全員に招集をかけ、飛驒一之宮鬼川原で1万人を超える大集会を執行した。幕府は隣接の青山藩に命じて集会に集まった農民に鉄砲を撃ちかけて(幕府が百姓一揆に鉄砲の使用を許可した最初の事例)、大集会は武力によって一応鎮圧されたが、この騒動の首謀者7名(この中には名医で知恵者として、陣屋(代官所)にも出入りを許された私の祖先、町方伊兵衛(73歳)も含まれていた)は捕えられ打ち首獄門となり、そのほかにも多くの農民が磔や死罪、遠島などの裁きを受けた。農民一揆の指導者たちは、あまりにも犠牲者が多く出たため、嘆願など合法的な手段によって、粘り強くこの窮状を幕府に訴え続けたが、成果があがらなかったため、老中門前に捨て訴を執行するという行動に出た。これにより、幕府勘定奉行が動いて幕府巡検使一行が飛驒に入り、大原郡代と願ひ方の農民が対峙する形で吟味が行われた結果、郡代側の非が明らかとなって、大原郡代は即日郡代職を召し上げられ、八丈島へ流罪となった(徳川幕府290年間の歴史の中で、幕臣旗本が遠島となったのはこれが初めての事例である)。

この騒動で江戸に赴いた農民の数は50名を超え、江戸滞在延べ日数は3,000日にも及び、数千両にも達したと思われる費用(江戸往復の必要経費は1両1分)は、すべて郡中会計(個々の農家負担)から賄われた。このように飛驒人のDNAには、さまざまな歴史に培われた結果として団結して行動するという人間性が刷り込まれている。

3 飛驒獣医師会と後継者育成

(1) 飛驒獣医師会

飛驒獣医師会の1年は、高山で一番の老舗「洲さき」(寛政6(1794)年創業で、茶道宗和流の会席料理を継承する220年以上の歴史を誇る老舗)で例年行われる総会で始まる。総会は古くからの飛驒の慣例に従って、必ず「座付き」で始まり、これに飛驒地方独特の祝い唄「めでた」が続き、「めでた」が終わると、ようやく無礼講となり宴席が始まる。これには厳しい決まりがあり、「座付き」の途中で隣人と会話をしたり、よそ見をしようものなら、一通りの儀式が終わると同時に、会員の目の前で老田会長から目の玉が飛び出るほど、叱責の言葉が発せられた。また、診療などで開宴に遅刻したら叱責され、ネクタイを忘れて出席した者には家まで着替えに帰されることもたびたびあった。私がまだ飛驒に赴任し

て間もない頃、老田会長に「老舗“洲さき”で総会が催される飛騨獣医師会の一員となれて光栄です」と話したところ、「形だけではなく、獣医師としてこの席に出るのにふさわしい人間にならなくてはいけない」と、諭されたことがあった。このようにして叱咤激励されて若い獣医師は教育され、それぞれの時代に会長の手足となって獣医師会活動を支える後継獣医師として立派に育てられている。

(2) 飛騨獣医師会の行動理念

およそ千数百年にわたる歴史の流れの中で、さまざまな体験から得た「物事に対処する知恵」は飛騨人のDNAの中に刷り込まれ、現在も息づいているものと考えている。飛騨獣医師会でも何か事が生じた場合、そのDNAの記憶に基づいて行動を起こすのである。

- ①組織のリーダーは、必ず成功させるという確固たる信念に基づいて対処する方策を深く慎重に思考する。
- ②これを獣医師会役員会に諮り、共通の情報として実施の方向性を確認する。
- ③決定した方策を確実に実行するために、また会員が行動しやすくするために団結する。

どの組織でもこのような手順が取られていると思われるが、飛騨獣医師会の場合は、10年ごとに記念事業が実施されており、まさに「継続は力なり」の諺どおり、その概要や成功例が会員の脳裏に刷り込まれて残っている。記念式典を実施する意義やおよその実施要項のイメージは、多くの会員の頭の中に存在している。また、記念事業を実施することによって、次世代のリーダーを模索し実践することで、獣医師会活動のノウハウを会得し、会員の結束はいつそう強固になっていく。このように、飛騨獣医師会の行動の基本的なスタイルは、新たな課題に挑戦するという意図の下では、まず「深く思考」し、これを組織内で実施方針と確認し、「互いに信頼し団結」して、「行動に移す」という形式を採っている。

このように書くと、飛騨獣医師会のすべての活動が理想的に展開されているように思われるかもしれないが、当然のことながらまったく問題を抱えていないわけではない。飛騨獣医師会活動の特徴であった20市町村を核とした活動スタイルが、10年前に実施された平成の大合併で、行政組織が3市1村と大きく様変わりした結果、以前のようなきめ細かな活動が難しくなった。また、職種の多様化や若い会員の考え方の変化など、時代の流れに翻弄されていることも確かで、今後の獣医師会活動を維持・推進する上で大きな課題となっている。

4 飛騨獣医師会の創立60周年記念事業に向けた取り組みの姿勢と成果

今回の飛騨獣医師会創立60周年記念事業における新

たな挑戦は、「公益法人として新たな課題に取り組み、数多くの成果を挙げつつある日本獣医師会活動状況について、藏内会長自らの言葉で、飛騨獣医師会の会員の皆さんに直接伝えていただく」ことであった。藏内会長の講演は、日本獣医師会会長であると同時に、7期目となる県議会議員としての実績を生かし「日本医師会との学術協力の推進」や、「勤務獣医師の待遇改善」「西表ヤマネコの保護活動など九州地区における動物保護活動」を推進するための活動として、大臣等政府関係者とのやり取りの現況を聞かされただけでも心躍る新たな知見であった。さらに活動範囲は日本国内にとどまらず、スペイン、英国、モンゴルなど広く海外に及び、きわめて格調高い充実した内容の講演が展開された。来賓として講演を拝聴された高山市長をはじめ、県議会議員や県内の関係機関の代表者の皆さんも、大きな刺激を受けられたようだ。講演後に行われた懇親会の席上で、異口同音に日本獣医師会の広範囲にわたる活動とその成果に驚いているとの言葉をいただいた。

われわれのように、目前の身近な問題に向き合っている地方の獣医師にとっては、講演のすべてが、われわれの知らない新しい世界に目を開かせるものであった。豊富な経験と多くの実績に裏打ちされ、吟味された言葉で語られる活動とその内容は、あたかも「新しい知識の微風に顔をなでられた」ような清々しさと、新たな情報と巧みな話術に思わず引き込まれてしまう面白さも感じられる素晴らしいものであった。

5 終わりに

～エンジェル・シェアー、記念式典を巡る心の交流～
最後に、私ども夫婦は飛騨獣医師会創立記念式典を巡って、まったく予想もしていなかった素敵な心の交流を経験した。10～20数年間にわたるウイスキーの熟成過程で、原酒が蒸発して目減りする分を「エンジェル・シェアー」（天使の分け前）と称して、ウイスキーが美味しくなるために“天使にもお裾わけ”を提供することをこのように称するという。数日間、公私を共に過ごした藏内会長ご夫妻と交わしたさまざまな会話の端々から伝わってくる、質の高い、藏内会長ご夫妻の立ち振る舞いであり、何気なく交わした言葉の端々から読み取れる豊かな人間性について、私ども夫婦は楽しくとても豊かな時間を過ごさせていただいた。11月17日の夕方、大役を終えてホッと一息つきながら、家内とそのことについて話をしていた時のこと、携帯電話がメールの配信を告げた。携帯を開くと「この度は大変お世話になりました、無事バンクーバーに着きました、奥様にも宜しくお伝え下さい 有難うございました」藏内会長からのメールだった。私は、まさかの予期せぬメールに驚きを隠せなかった。藏内会長からのメールを見て「さすが

藏内先生！」と、思わず私と家内の口からほぼ同時に、同じ言葉がこぼれた。日本獣医師会会長としておよそ39,000人の獣医師の先頭に立つためには、会長として必要とされるさまざまな知識や巧みな話術ばかりでなく、細部にわたる心遣いなくして多くの獣医師の信頼は得られないことを、いまさらのように感じさせられる出来事であった。記念式典における藏内会長の講演に加え

て、プライベートなお付き合いの中で藏内ご夫妻から、心に暖かにそよ風を感じるような、素敵な贈り物をいただいた。あらためて、藏内日本獣医師会会長の飛驒獣医師会60周年記念へのご出席にお礼申し上げるとともに、今後のご活躍とご健勝を、心よりご祈念申し上げ筆を置く次第である。

II 飛驒獣医師会と飛驒牛の育種改良

1 はじめに

先に述べたように飛驒の匠の血が流れ、不撓不屈の精神を持った獣医師という技術集団が、「飛驒牛」の育種改良という壮大な目標を立て、その実現のために総力を注いで、ついに飛驒牛ブランドを確立したことは、飛驒獣医師会の誇りとするものである。飛驒牛の育種改良は昭和12年頃始まったが、当初、大きな進展は認められなかった。昭和28年に第1回が開催されて以降、4年ごとに開催される全国和牛能力共進会への出品とその成果に基づいて、新たな飛驒牛改良の方向性を確認し、飛驒獣医師会会員が一致団結して改良への取組みが続けられた。大きな転機を迎えたのはちょうど飛驒獣医師会が創立された昭和30年頃で、同じ大原地区に導入された名牛「田尻」の直系の種雄牛「福鹿」の広域活用を巡って、関係する獣医師らによって「福鹿保存会」が組織された時である。この時、それまでの「曳き掛け」から「人工授精」活用への変更や、交配する繁殖雌牛の選定基準の設定など、現行の「飛驒牛改良指針」に近い指針が設定された。これを契機として、初代飛驒獣医師会会長を20年もの長きにわたって務められた老田 剛先生と獣医師会会員が中心となり、飛驒牛改良方針を検討する目的で「飛驒和牛改良協議会」が組織され、ここで決定された改良方針に従って、飛驒地域の全市町村が同一歩調で飛驒牛改良に取り組むことが可能となった。そして、平成4年に飛驒牛のブランドが確立された。以下にその概要を述べる。

2 原種牛の導入と育種

飛驒牛の育種改良は、昭和12年に飛驒出身で国際獣疫事務局(OIE)日本代表として国際専門委員を務められ、兵庫県に設置された農林省獣疫調査所の初代所長を務められた二村彦次郎博士によって、出身地大野郡清見村(現高山市清見町)に改良用繁殖雌牛として導入された5頭の但馬牛を起源として始まった。しかし本格的に育種改良が進展するまでにしばらく時間を要した。その後、「飛驒牛」改良のために、資質系は但馬から「田尻」や「波」系を、体積系は広島から「あずま蔓」や「第21深川」系を、岡山からは「中屋」系の種雄牛が新た

に導入された。「系統間交配」の改良手法を巧みに使いながら「質」及び「量」の両面から着実に進めていった。この時期は昭和28年にわが国で初めて全国規模の「第1回全国和牛共進会」が広島で開催されるなど、わが国で近代的な和牛改良が始まった時期であり、飛驒牛の改良もほぼ同時期から本格化し、また、飛驒獣医師会の歴史も「飛驒牛改良」の歴史と伴にあるといっても決して過言ではないほど、歩みを同じくしている。老田先生の飛驒牛改良に打ち込む姿勢は老田天皇と揶揄されるほど厳しく、農家に対しても技術員に対しても一切の手抜きは許さなかった。昭和30年代の「飛驒牛の改良」の成果は全国和牛能力共進会に出品はするものの、先進地である中国地方の各県の出品牛に比較して見劣りがするもので、飛驒牛の欠点を確認し、後の具体的な改良目標を立てるのがおもな目的だった。

3 飛驒牛ブランドの確立

昭和42年に体積の改良を目的に岡山県から導入された「新月」によって飛驒牛の体格が格段に大きくなり、それまで地方の一市場でしかなかった高山子牛市場が全国から注目されるようになった。これを契機に飛驒牛改良の成果に光が射し始めた。発育性に優れた「新月」の産子が非常に高値で売れたため、改良用の繁殖雌牛として保留された母牛に、「新月」を親子掛けする事例が見受けられるようになった。そのため、昭和52年、飛驒和牛改良協議会は「飛驒和牛交配指針」を作成して、獣医師会は組織力を生かしてこの交配の徹底実施を指導した。一方、飛驒牛改良を進める方策として「飛驒を中心とした和牛の育種改良事業の理論と実践」と題して、理論的に飛驒牛改良の方向性を広く和牛生産農家や畜産関係者に示すとともに、岐阜県に対してもこれに基づいて和牛改良に取り組むことを提案した。県はこれを受けて、翌年新たに「岐阜牛系統固定推進事業」(後に飛驒牛系統固定と改正)の実施を決め、新しい飛驒牛改良事業がスタートした。

さらに、獣医師会関係者は種雄牛育成や県外からの種雄牛導入にも積極的に関与し、昭和56年には兵庫県から名種牛「安福」が導入され、飛驒は全国から注目され

る和牛生産地へと生まれ変わった。「安福」後継牛として「飛驒白清」(安福息牛)の確立にも成功して、平成4年、岐阜で開催された「第8回全国和牛能力共進会」において、岐阜県出品牛は内閣総理大臣賞及び最優秀枝肉賞を受賞して、「飛驒牛」はわが国を代表する和牛ブランドとして不動の地位を獲得するまでになった。岐阜県はこれ以降県外からの種雄牛導入を中止し、県内での種雄牛育種によって、「白清85の3」(「飛驒白清」息牛・安福の孫)「花清勝」(「白清85の3」息牛・安福のひ孫)など全国トップクラスの種雄牛を次々と確立して、飛驒牛ブランドを堅持する原動力となった。

平成18年、鳥取で開催された第9回全国和牛能力共進会の「第8区若牛後代検定区」に出品する牛を育成するための種雄牛の名前を付けるに当たって、一目で「飛驒牛」と解るような名前として、飛驒の枕詞であり、郷土出身の巨漢の名力士「白真弓」にちなんで「飛驒白真弓」と小生が命名した。「飛驒白真弓」産子の肥育牛を出品した第8区で、第8回岐阜和牛共進会に続いて「最優秀枝肉賞」を連覇し、大会史上初の快挙を成し遂げ、わが国を代表する和牛ブランドとして「飛驒牛」の地位を確固たるものにした。これらの成果は、われわれ獣医師にも自信を与え飛驒獣医師会活動に大きく影響することになった。

4 遺伝性疾患「クローディン16欠損症」の原因究明と発生予防

話はやや遡るが、岐阜県は昭和62(1987)年に鳥根県で開催された第5回全国和牛能力共進会・肥育牛の部で優等2席に入賞したことで、「飛驒牛」はようやく全国の畜産関係者から注目されるようになっていた。平成3年には高山子牛市場の年間平均価格は608千円と全国で一番高い子牛市場となった。しかし、この時期、飛驒

牛改良とブランド化の最大の危機とも言える出来事が起こった。それは子牛に腎臓機能不全を伴う発育不良を特徴とする原因不明の疾病が発生したことで、平成2年頃から徐々に発症牛が確認され始め、平成5年には100頭近くにまで達した。私は年々倍々ゲームのように発症牛が増えていくという異常事態に、このまま策を弄せずして放置しておく、ようやく手にしかけた「飛驒牛」というブランド牛の産地崩壊を招くのではという危機感を覚えた。そこで飛驒家畜保健衛生所を中心に、特に発症牛が多く生産された特定の村の獣医師等の協力を得て原因究明に取り組み、この村で過去3年間に生産された数千頭の子牛の血統構成や発症の有無を調査した。その結果、昭和56年兵庫県より導入された飛驒牛改良のカリスマともいわれる種雄牛「安福」の「安福娘牛」の産子に局限して発生していることを突き止めた。さらに、保因牛と推測される「安福娘牛」と「安福系種雄牛」とのキャリアー同士を交配した子牛に多発する傾向があることが明らかとなった。これらの事実から、これは「常染色体性劣性遺伝病」であろうとの仮説を立て、それに基づいて家畜保健衛生所と市町村獣医師が連携し、国内で最も高く販売できる可能性がある、「安福娘牛」にキャリアーと推察される「安福系種雄牛」との交配を避ける指導を徹底した。この発育不良子牛の試験的な予防対策の実施については、一部の農家や関係者からの大きな反対もあり、「科学的根拠が十分ではない仮説」に基づいた発生予防措置の実行は大きな賭けでもあった。また、「発生予防対策の実施」については、岐阜県全域で実施することが望ましいと、県に対して予防対策の実施を働きかけた。しかし、遺伝性疾患であろうという「仮説」に基づいて、県全体で発生予防対策を実施することは「和牛生産農家の理解を得るのは困難」との理由から、県は次期尚早として発生予防対策の実施を見送っ



平成25年9月26日、「動物ふれあいフェスティバル in 飛驒」で5,000名もの参加者を集め、盛會を祝して近藤県獣会長(前列中央)を囲み、写真に納まる飛驒獣医師会会員一同

た。しかし、飛騨地域の獣医師等関係者はこの時を逃すと飛騨牛改良の将来に禍根を残すとして、原因遺伝子が特定される5年も前に、飛騨地域独自の発生予防対策の実行に踏み切った。その結果、キャリア同士の交配を制限する指導を開始した翌年から、発症牛は減少し始め、3年後にはピーク時の10分の1近くにまで減少、仮説に基づいたわれわれの取組みが間違っていなかったことが証明された。県もこの実績を受けて、発生予防対策として県内全域での交配制限の実施に踏み切り、岐阜県全体での発生予防対策が実施されることになった。飛騨地域の獣医師の結束と実行力によって決行された予防対策の実施により飛騨牛ブランド崩壊の危機を脱することができた。さらに、平成11年岐阜県畜産研究所（高山市清見町）によって、世界で初めて原因遺伝子が特定され「クローディン16欠損症」（和牛における最も重篤な症状を示す遺伝病）と命名され、遺伝子診断法も開発された。

5 終わりに

この遺伝性疾患の原因究明は飛騨牛のみならず、わが国の和牛の生産振興に大きく貢献する成果となった。これはわれわれ飛騨獣医師会の歴史に非常に大きな足跡を刻むことになった。前編で飛騨の置かれた歴史的背景の中で育まれた飛騨びととしての獣医師の生き様について述べたが、小さな一支部が県の改良方針を大きく変えるほどの、先見性のある企画力と実行力示せたことが、結果として飛騨獣医師会の結束力をいっそう強いものに変えて、飛騨牛改良の分野においても大きな成果を生む原動力となったと考えている。このように、歴史に生まれ



樹齢1250年の飛騨国分寺大銀杏の前で記念写真に納まる。左から石黒岐阜県獣医師会会長、藏内日本獣医師会会長ご夫妻、近藤前県獣医師会会長ご夫妻

「黄葉の いちよう伝説 ひだ古刹」 玉林 

た「飛騨の匠」の技術と粘り強い人間性を備えた飛騨びととしての獣医師魂は、先人が厳しく後輩を指導することで、秩序と強い連帯感をもって次世代に継承されていくと信じている。